

ぼいす

北区飛鳥山博物館だより

2007. 9. 20

19

秋の博物館を味わいつくそう!

秋は博物館を楽しむベスト・シーズン。
企画展をゆっくり見る、講座でじっくり学ぶ、
野外講座で新しい発見をする…。
秋冬の博物館をお腹いっぱいになるまで
味わいつくしてみてはいかがでしょうか?



[企画展]

明治期における東京北郊の風景



[野外講座]

探訪・北区の神社
北区のいまむかし
新・遺跡探訪
鎌倉歴史探訪…



[講座]

北区で学ぶ民俗芸能
初級考古学講座…

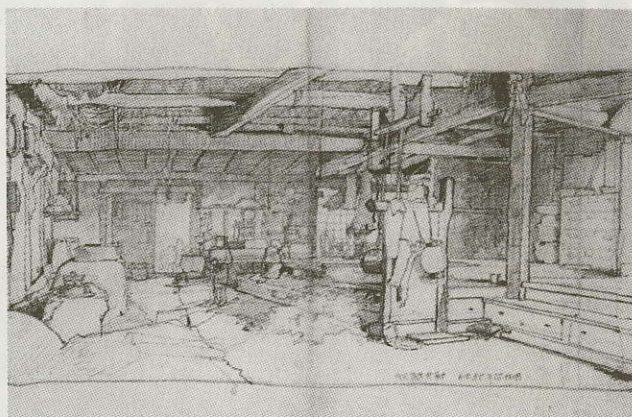
会期：10月27日(土)～12月9日(日)

会場：特別展示室

観覧無料

北区はその名称のいわれにもなっているように足立区・荒川区・板橋区などと並んで東京北部に位置しています。もともと近世までは江戸市中を取巻く江戸近郊農村の色合いの強い地域でしたが、明治時代の初めに軍事施設や製紙工場・化学工場などが相次いで立地し、新橋・横浜間に続き蒸気鉄道も早期に敷設され、瞬く間に近代化を遂げていきました。

田園地帯が都市化の波に洗われはじめてきた明治20年代。洋画家小山正太郎が団子坂で主宰していた画塾「不同舎」^{かのこぎたけしろう}の塾生であった鹿子木孟郎は他の塾生らと北豊島郡や南豊島郡など比較的近郊の地域に足繁く通い、短期間のうちに素描画を数多く残しました。その中には今では確認できない地点の風景画も含まれ、とても貴重な画像資料になっています。本展では、府中市美術館にご協力をいただき、これら貴重な素描画の一部を借り受け展示するとともに、あわせて錦絵・写真・絵はがき・地図・日記・小説など様々な資料を展示し、明治中期から後期にかけての北区を中心とする東京北郊の風景を再現することを試みます。



鹿子木孟郎作「十条村民家台所」府中市美術館蔵

<関連事業>

【現地探訪会】

11月10日(土) 午後1:30～4:00 定員20名
鹿子木孟郎が素描画を残した場所を訪ね歩き、現在と比較しつつ当時の様子を振り返ります。
案内人：本展担当学芸員・中野守久、ほか

【記念講演会】

11月25日(日) 午後2:00～4:00 定員80名
鹿子木孟郎が不同舎時代に成した修行と画業に果たした役割などについてお話しいたします。
講師：府中市美術館学芸員・志賀秀孝氏

※いずれも往復はがきでお申し込みください。詳しくは当館までお問い合わせのこと。

ぼいす

いささか旧聞に属するが企画展「江戸のリッチモンド」を準備中の2004年春から翌年冬にかけて3回ほど、プライベートに英国の博物館に行き、先方の担当者とお会いする機会があった。ただでさえ不慣れな異国での堅苦しい気分を和らげてくれたのが、



人々の出会いの場…博物館

ミュージアムに付設されたカフェテリアやレストランであった。別に豪華なメニューでも何でも無い、温かいお茶と軽い食事、そして若干のアルコールを摂っただけのことだったが、これがどれだけ和みの場となっているかと痛感されたものである。何よりもこの背景にはかの国では博物館が同時に社交の場でもあるという知的伝統の中に根ざしていることであった。もちろん食事内容も、流行の「モダン・ブリティッシュ」風で美味しさは請合いなのだが、それにしてもし入館者数と客平均単価、シビアな損益分岐点など厳しい経営環境のなかで運営しているに違いなく、健闘努力している姿に感銘を受けたものであった。

ミュージアム・レストラン礼賛

現代の博物館は、ただ所与の事実として資料がある、展示があるというだけでなく、博物館を介在にして人と人が出会う場としての機能、つまり博物館とゲスト、さらにはゲスト同士の交流の場が形作られることが望ましい。日本でも最近、各地のミュージアム・レストランの拡充ぶりは素晴らしく、中にはレストランを目的に来館する向きもあると聞く。いよいよ本物の豊かさが体感される、博物館の魅力が競われる時代となったのである。

博物館が知識のみならずレクリエーションの場として、身体性の回復と五感の充足感が感じられる、もてなしと寛ぎの空間であることにもっと真剣に学ぶべきかもしれない。(1)

見て、聴いて、さわって、そして歩く — 初級考古学講座 考古学をはじめようムーンライト編 —

当館では年間を通してさまざまな講座を開催しています。今回はその中から、5月から6月にかけて行われた「初級考古学講座 考古学をはじめようムーンライト編」をご紹介します。

この初級考古学講座はマイナーチェンジを重ねて、今回で9回を数える定番講座です。考古学の入門講座として座学と遺跡見学会を組み合わせた合計4回の連続講座となっています。今回はムーンライト編ですので夜間講座として開講しました。(遺跡見学会のみ昼間に行いました。)座学といってもただお話をするだけではありません。そこは博物館ですので実物資料をお出しして、間近に見ていただきながら、時にはさわっていただいて、目と耳だけでなく、手もフル活用して実感してもらいました。初めての古代の感触に受講者の目はきらきら。石斧を持ってみた方は「意外に重いね」との感想が。

さて、ファイナルステージは遺跡見学会です。区内は住宅が建ち並び、遺跡を地面の上から観察することができません。そこで、東京近郊の遺跡を訪ねることにしました。今回行ったのは千葉県佐倉市くるわのうちの曲輪ノ内貝塚や成田市こおすはらの公津原古墳群です。特に曲輪ノ内貝塚

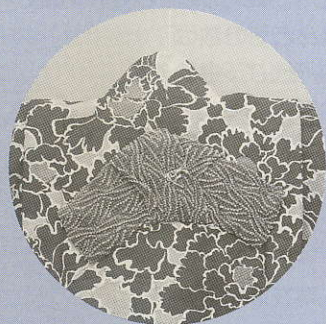
は畑の中に貝殻が散らばり、見た目にもそこに遺跡がある！という感じでした。さらに、土器片までも表面採集できました。「この土器はいつごろの土器ですか?」「これは縄文土器ですね。せっかくだからこの土器について調べてみてはいかがですか?」。考古学に興味をもってほしいと思って始めたこの講座。みなさん、その第一歩を踏み出してくれたでしょうか。(直)



目線の先には貝殻の散布が。(作物の出来を見ているではありませんよ。)

資料紹介

小さきものへの祈り — 女児用着物 —



背守り

この資料は、北区豊島地区で幕末期には名主を務め、後に醤油醸造業を営んでいた旧家から寄贈された女児用の普段着です。この普段着の背の部分には、「背守り」が縫い付けられています。今回はこの「背守り」のお話です。

背守りとは、子供の着物や袖無羽織などの背中に、色の付いた糸で模様を縫いつける魔除けのことで、子供に災いがかからぬことを願うおまじないの一種です。

古くは鎌倉時代頃に成立した『春日権現記絵』にも描かれていますが、子供の着る一つ身の着物には背縫いがないため、無防備な背中から魔物が入るとい言い習わしがあり、それを防ぐために縫い目をつけるようになったと言われていました。

背守りは「ヒキアゲモノ」などとも呼ばれますが、これは子供が災難にあった時に荒神うぶすなや産土神が引き上げてくれるためであると伝承されています。この着物の背守りの中心から垂れている数本の糸は、その名残ではないかと思われま。

背守りにはこの他にも、桃や柘榴ざくろなど地域によって様々なものがあります。同家からいただいた着物には、方形の布切れを縫い付けた男児用の普段着も含まれています。

「七歳までは神のうち」と言われるように、今よりも子供の死亡率が高かった時代には、肉体的にも社会的にも不安定な存在とされ、そのため出産や産育に関する習俗も多くありました。

この「背守り」にも不安定な子供を守ろうとする親の願いが込められています。(綾)

クローズアップ

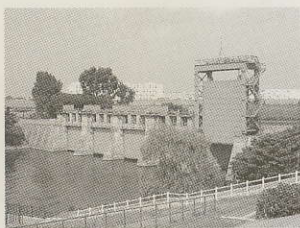
志茂・岩淵

赤羽駅の東に位置する岩淵は江戸の頃、日光御成道の宿場として賑わいのあったところでした。さらにさかのぼれば、鎌倉時代の文学「とはずがたり」にその様子が記されており、古くから開かれていたところだということがわかります。一方、志茂はもとは「下村」といい、これは「岩淵本宿の川下の村」という意味からきています。この志茂と岩淵を結んでいた古い道が今でも残されており、そこかしこに往時を物語るいろいろなものに出会うことができます。今回は荒川沿いの岸边にたたずむ古い町、志茂と岩淵をクローズアップ！

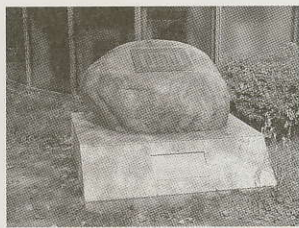
荒ぶる川を治めた英雄——旧岩淵水門

赤水門の名前で知られる旧岩淵水門。かつては荒川の洪水から人々を守る役目を果たしていました。さて、この水門の工事。荒ぶる川を治める工事でしたから、それはそれは大変な事業でした。そしてこの工事の全責任を任されたのが、青山士あきらでした。彼は日本人で唯一、あのパナマ運河の大工事に参加した優秀な技術者だったのです。彼の指導のもとに工事は進められ、8年を費やして、大正13年(1924)に水門は完成しました。

現在は老朽化のため、その役目を新岩淵水門に譲りましたが、今でも往年の雄姿を見ることが出来ます。(宮)



今も堂々とした姿は健在！

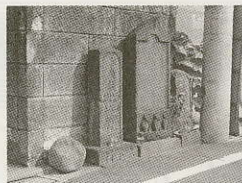


青山技師の想いが刻まれた記念碑

誠実と信念の人～青山士あきら～

荒川知水資料館AMOAの建物前に「荒川放水路完成記念碑」がありますが、工事の最大の功労者である青山士あきらの名を見つけることは出来ません。これは、工事は皆の努力でできたもので、自分一人がやった工事ではないという彼の考えからであり、このことから、青山士あきらの人柄が感じられます。

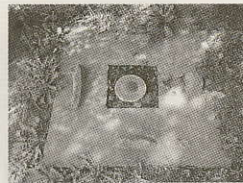
また戦時中、歯向かえば命の保障はない軍人から、パナマ運河を破壊する方法を問われても、青山技師はこれを拒否しました。——自分の信念を貫いた男、それが青山士あきらでした。(宮)



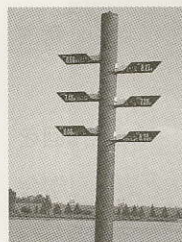
⑨



⑧



⑦



⑩



⑪



⑫



- ①今に残る古い道筋 ②枯れる事なく今も枝葉を広げる楠木(西蓮寺) 動おみくじ機が！ ⑥志茂橋を渡ると荒川知水資料館です。⑦ここはちい～！ ⑨“右 下村”昔の道標です。⑩過去の水かさベスト6！の古い建物

思いの結晶——正光寺の大観音

明治の頃、荒川の度重なる洪水によって土地が荒れ、疫病が流行し、尊い命が失われました。そんな時、近所の人達の願いや思いを受け、正光寺の和尚が、安全祈願と亡くなった人々の供養のために観音像を造ってはどうかと皆に呼びかけました。人々は我も我もと進んで多くの金品を寄進しました。とりわけ女性たちは、婦人の魂として大切にされてきた古銅鏡を「ぜひ観音様へ！」と。なんとその数は百枚余りにも上ったそうです。そして、金の指輪かんざしや簪びやくこうは眉間の百毫や光り輝く宝冠に。

こうして、明治23年(1890)、約10メートルもの大観音が正光寺に姿を現しました。昭和に起きた火災で本堂は焼けてしまいましたが、皆の強い思いによって守られたのか、大観音は無事だったのです。現在は閑散としてしまった正光寺の中で、観音さまは昔と変わらずに微笑んでいます。(木)



日差しを浴びて微笑む大観音

思い出写真館



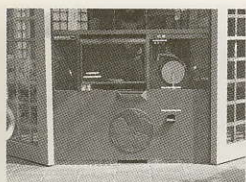
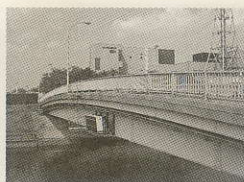
小川に架かる石橋（昭和29年）
家の裏で洗濯をしているご婦人。
のどかな一コマですね。



七五三で賑わう熊野神社（昭和27年）
千歳あめの袋をさげた姿もみうけられます。



台風と戦う岩淵水門（昭和33年9月27日 22号台風）
「こんな所にきてはあぶないよ」
「ごめんなさ〜い」

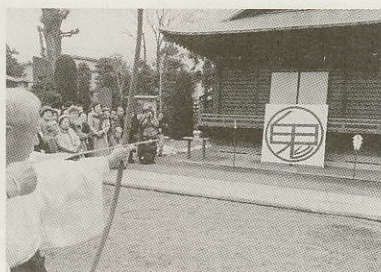


③ひっそりとたたずむ板碑（西蓮寺） ④角の庚申塔 ⑤なんと自己
2.59m。高さの基準になるポイントだよ。 ⑧広々とした荒川。きも
⑩全国草刈り競争を記念した「草刈りの碑」 ⑫今でも現役。黒田機器

OBISYA——熊野神社の白酒祭

毎年2月7日に熊野神社で行われる白酒祭。祭の中のメインイベントは「鬼」の字が描かれた的を射るオビシャ（御歩射）です。この行事の意味は「鬼」を射ることで、その年の厄を祓い縁起を担ぐということです。新しい氏子総代、宮司、禰宜の方たちが順に矢を射ります。最初は捨て矢といってわざと地面にはずすのが慣わしで、二本目が当たると歓声と拍手に包まれます。（希望者が行うこともできる嬉しいサービス有り。）

オビシャの間は冷えた体を温めるものが欲しくなりますね。今は甘酒を配っていますが、以前は荒川の水で作った白酒を配っていたので、白酒祭と呼ばれるようになったそうです。温かい甘酒を飲みながら伝統行事の雰囲気を楽しむのはどうでしょう。都内北部では珍しい「鬼退治」を見にぶらりと行ってみたいかが？ (T)



慎重に鬼退治

学び舎として下村を支える——西蓮寺

真言宗智山派に属する西蓮寺は、静かで落ち着いた境内を持つ、散歩の足休めにぴったりな寺院。しかしここが北区最古の家塾があった寺だという事は、あまり知られていません。

元治元年（1864）年から、西蓮寺は本堂の東側を学舎として、家塾「青蓮堂」を開校しました。子ども達に和漢書籍の読書、習字を和尚自ら教授したこの家塾は、下（志茂）村唯一の学び舎となったのです。明治以降は簡易科田中学校として継続されていましたが、設備が不完全とみなされ明治32年（1899）に廃校となりました。

西蓮寺はその後、関東大震災によって多大な被害を受け、旧本堂は現在では見ることが出来ません。昭和8年（1933）に再建された本堂の前、楠の大樹だけが当時の面影を忍ばせます。

(阿)

十条の台地から…

大地・水・人

久保 埜 企 美 子 (当館学芸員)

近年、もっとも頻繁にテレビに登場する北区の公共施設はどこかで存知だろうか。

答えは中央公園文化センター。2時間ドラマ・ファンの方なら「あぁ」と頷いてくれるだろう。ドラマのなかで、同センターはしばしば裁判所や病院などの設定で使われる。どこか権威を感じさせる意匠が好まれるのだろうが、それもそのはず、この建物は昭和5年(1930)に東京第一陸軍造兵廠の本部として建てられたものである。かつては背後の公園と自衛隊の敷地を含む一帯、また石神井川を挟んだ対岸に造兵廠の広大な工場が広がっていた。

十条の台地に陸軍の工場が建設されたのは明治38年(1905)。小石川の東京砲兵工廠が手狭になったため、約10万坪の土地を買収して同廠のうち銃砲製造所(のちの東京第一陸軍造兵廠十条工場)が移された。この地が選ばれたのは、広大な土地が確保できること、鉄道や荒川を使った運搬の利便性が高いこと、石神井川の水が利用できること、さらに板橋火薬製造所に隣接していることが主な理由である。先に建設された板橋火薬製造所や分工場の滝野川村火薬製造所も、土地選定の決め手が石神井川の水利だったことを考え合わせると、石神井川や荒川の存在がい

かに魅力的であったかがわかる。さらに十条工場建設にあわせて滝野川らいてうばの火薬製造所の隣接地も買収され、雷汞場らいてうば(のちの東京第一陸軍造兵廠滝野川工場)が移転してきた。

第一から第三製造所まで擁する十条工場の広大な敷地内には、食堂や売店をはじめ病院や保育所まで完備され、戦中には約13,000名におよぶ従業員が働いていた。勤務は昼夜二交替制で、配属ごとに決められた門から出入りしていた。朝夕に本部建物の周囲を多くの従業員が行き交っただろうが、工場の従業員にとって将校たちが出入りする本部建物は近くて遠い場所だった。

一方、向かい側の滝野川工場では爆発しやすい火薬を扱っていたため、工場が整然と立ち並び十条工場と異なり、工場の各棟が土塁で囲まれていた。雷管や信管を作る危険な職場であったが、昭和19年(1944)から終戦まで学徒動員の女学生も大勢働いていたという。王子駅から歩いて滝野川工場へ通っていた女学生たちの目には、当時レンガ色だった本部建物が「ものすごく大きく」「立派」に映った。

昭和20年(1945)4月13日夜半の空襲で十条・滝野川の両工場は大きな被害を受け、終戦後は米軍に接収されるなど、時代の変転を味わいながらも「建物」はそこに在り続けた。かつては「近くて遠い場所」だった建物も、今では文化活動の場として人々が絶えず出入りする活気ある空間となった。私はその最上階に上がらせてもらったことがあるが、背の高い窓からは周囲を広く見渡すことができた。約80年間、その窓は変わりゆく時代、町、そして通り過ぎていった人々を眺め続けてきたのだろう。

「ご存じですか?」公園内に唯一残された銃砲製造所以来の赤レンガの建物が、平成20年度にオープンする新中央図書館の一部となって生まれ変わります。

通りに面した、とあるソバ屋の店先の風景である。半そでやランニング姿の人々が降りしきる雨の中、傘をさしてたたずんでいる。足元はふくらはぎ近くまで水につかり、今にも「じゃぶじゃぶ」という音が聞こえてきそうだ。

北区は昔から水害の絶えない所で、明治時代になっても荒川の水害に悩まされ続けた。大正13年(1925)に荒川放水路の完成で一応決着をみたが、昭和30年代以降は台地上の都市化にともなって、石神井川などの山の手河川の洪水が頻繁に起こるようになったという。昭和40年代の石神井川の護岸工事や飛鳥山の地下を通るバイパス水路の建設は、そうした都市化による洪水の対策として行われたものだ。この写真は赤羽西の弁天通りのものだが、舗装に伴い水が町にあふれる様子がよくわかる。昭和30年ごろの写真ということなので、昭和30年(1955)7・8月の大雨か昭和33年(1958)9月の狩野川台風のときの写真だろう。

ところで、今回この写真を特に紹介したかった理由は

別にある。それはたたずんでいる人々の表情(カオ)! 子供はともかく大人に至るまで実にいい笑顔だ。中央の店の主人と思われるおじさんも、店のことはおかまいなし。いつもと違う風景を子供のように楽しんでいる。少々のことでは動じない、実におおらかな笑顔だ。

ちなみに画面左の価格表示板をみると、「もり及かけ三十円」、「月見五十円」、「天ぷらそば六十円」、「カツ丼百円」…。いろいろと時代を感じさせる1枚だ。(F)



赤羽西弁天通り(昭和30年頃、故石橋幸一氏撮影)

博物館インフォメーション

● おかげさまで15,441人!

今年3月20日から5月6日にかけて行われた春期企画展「縄文人の祈り-東谷戸遺跡の土偶-」には、15,441人の方々にご来場いただきました。ありがとうございました。ご覧いただいたお客様からは多くのアンケートをお寄せいただきました。その中からご感想を少しだけご紹介します。

「いつの時代でも子供が無事にと願う心は同じだと思いました。」(50代・女性)

「縄文人の気持ちがわかるように思えました。今日の人々が忘れていたことがたくさんあるように思います。」(70代・女性)
縄文人の気持ちをくんでいただき、大変嬉しく思います。



入口を入ると、そこは土偶の世界

● 実習生が奮闘しました!

8月7日から19日までの約2週間、今年も博物館学芸員を目指す4名の大学生が実習生として汗を流しました。講座のアシスタントや屋外取材などハードな内容でしたが、若さと明るさで元気にこなしてくれました。実習を通して、学芸員には体力が必要だとわかったとの声も…。号の「クローズ・アップ志茂・岩淵」は4名の取材の成果です。ぜひご覧ください。



資料撮影にもチャレンジ

● 人物往来

本年3月31日をもって、前館長・遠藤時雄が北区教育委員会事務局庶務課副参事として異動し、後任として荒井光雄が新たに館長を務めることとなりました。今後ともよろしくお願いいたします。

● 飛鳥山にまつわるモノや古い写真を探しています!

当館では飛鳥山に関するモノ資料や写真を探しています。お手元にお持ちの方はご情報をお寄せ下さいますようお願いいたします。

あわせて、飛鳥山に限らず北区内で使われていた生活用具や北区に関係する古い文書、また昔の街並みや人々の暮らしがうかがえる写真なども探しています。ご一報は03-3916-1133(担当クボノ)まで。

ル
ーブルの
微笑み見たり
レセプションリスト

学芸員リレーエッセイ

博物館いるは歌留多

ご来館のみなさまが最初に顔を会わせる博物館スタッフは、当館の受付の女性たちです。どれほど充実した博物館サービスも印象も、この来館の瞬間に決まってしまうほどに怖いのが、受付の機能であり対応であります。

地域博物館である当館では、それぞれさまざまなお客様がいらっしゃいます。ご来館者へのご案内や日常一般のご質問窓口対応はもとより、夏休みにはお子様方の宿題、自由研究の素材探し、はてまた研究者の学術調査活動を目的にした学芸員への面会依頼、突然の外国人の訪問者と、それぞれ種々多様なお客様への対応が望まれています。

また時には複雑なニーズやご要望に対しては、ご理解をいただくために説明の委曲を尽すなど、それぞれ通り一遍の対応ではないお客様の目線にたった親しみ易さと、ジョブ・オン・ザ・トレーニングによって得た経験知識が必要とされています。

にこやかに迎えてくれる受付の対応には博物館らしい品格のある落ち着きがあり、当館のブランドを示す魅力のひとつとなっています。(1)

平成19年度下半期の主な催し物

秋 9～11月

- 特別展覧会「第6回人間国宝奥山峰石と北区の工芸作家展」(9/8～10/8)
- 講座「浮世絵でめぐる江戸名所」(9/23)
- 野外講座「探訪 北区の神社」(10/6・10/7)
- 野外講座「北区のいまむかし～北区の民俗を旅する」(10/20・10/27)
- 秋期企画展「明治期における東京北郊の風景」(10/27～12/9)
- 野外講座「新・遺跡探訪」(11/3・11/4)
- 秋期企画展 現地探訪会(11/10)
- 講座「北区で学ぶ民俗芸能」(11/17)
- 野外講座「鎌倉歴史探訪」(11/23・11/24)
- 秋期企画展 記念講演会(11/25)

冬 12～3月

- 講座「初級考古学講座 考古学をはじめよう サタデー編」(12/1・12/8・12/15・12/22)
- 野外観察会「江戸野菜・千住ネギの産地を探る」(12/7)
- 講座「民話に親しむ」(12/16)
- 講座「新聞から読む考古学 Part.2」(1/20)
- 体験講座「考古学体験講座 古代の技術をさぐる」(1/26)
- 小学校対応事業「来て、見て、さわって!むかしの道具」(1/12～2/28)
- 講座「北区の自然史を学ぶ」(2/17)
- 開館10周年記念企画展「名所の誕生」(3/20～5/6)

*催し物名は仮称、()内の実施日は予定です。詳細は当館発行の「催し物案内」、北区HPをご覧ください。

お知らせ

- 文化の日は観覧無料となります!
11月3日(土)は常設展示室を無料で観覧いただけます。この機会にぜひご来館ください。
- 渋沢史料館の臨時休館
渋沢史料館は本年5月7日から行われている館内工事のため、10月31日(水)まで休館いたします。その間、三館共通券は販売を中止いたしております。
- 年末年始の休館日
平成19年12月28日(金)～平成20年1月4日(金)

利用のご案内

【開館時間】

午前10時～午後5時
(有料の展示室への入場は午後4時30分まで)

【休館日】

- 毎週月曜日(国民の休日・振替休日の場合は開館)
- 国民の休日および振替休日の翌日(土曜・日曜日の場合は開館)
- 年末年始(12月28日～1月4日)
このほかに臨時休館日があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体	三館共通券
一般	300円	240円	720円
小・中・高	100円	80円	240円



- ・JR京浜東北線 王子駅南口より徒歩5分
- ・地下鉄南北線 西ヶ原駅より徒歩7分
- ・都電荒川線 飛鳥山停留所より徒歩4分
- ・都バス 草64、王40系統 飛鳥山停留所より徒歩5分

- ・小学生未満は無料
- ・団体扱いは20名以上
- ・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館をご覧ください。

編集後記

「観測史上まれにみる暖冬」と記した前号に続いて、今年の夏は「記録破りの猛暑」! そんな暑さの中、強い日差しをさけてか、館内特設の「きっずコーナー」にも連日小さな子どもたちが集いました。自宅の居間のように博物館で寛いでくれることを嬉しく感じつつも、子どもたちが外で思いっきり遊べないほどの厳しい夏を実感しました。

これから博物館のスタッフは、夏の汗が乾かぬうちに下半期に向けて汗を流すことになります。秋冬も飛鳥山で皆さまのご来館をお待ちしています!

北区飛鳥山博物館だより

ぼいす 19

- 発行 平成19年9月20日
- 編集 北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL. 03-3916-1133
- 発行 東京都北区教育委員会
〒114-0022 東京都北区王子本町1-2-1
TEL. 03-3908-1111 (代)
- 印刷 文明堂印刷株式会社